

「マイペンライ」は、タイ語で「なんでもないよ。気にしないで」の意味。アジアの人々のおおらかな心で交流が広がるようにとの願いを表現しました。

マイペンライ 通信

編集・発行 アジア保育教育交流推進実行委員会
(略称：大阪マイペンライ)

2011年8月18日

No. 83

TEL 072-645-7772

(森代表事務所)

FAX 06-6581-8536

(部落解放同盟大阪府連)

事務局 090-3948-8372 (稲葉)

大阪府各地で交流がはじまります・・・2011 招聘研修

タイ (DPF) のスタッフ2名を、3団体が受け入れ

今年の招聘研修は第19回を迎え、9月10日に、タイから2名のスタッフが来日します。来られるのは、ドゥアン・プラティープ財団のタッサニー・ヘンプラセットさんとノンラック・パーンデットさんと、同行通訳は同財団の中川紀子さんです。

受入れいただく組織は、部落解放同盟大阪府連は北芝支部、大阪教組は豊中市教組、自治労大阪府本部は大阪市職民生支部と茨木ユニオンです。

9月11日のオリエンテーションを皮切りに、9月12日から大阪府下のそれぞれの地域・職場で交流が始まります。皆さんよろしくお祈いします。(プロフィール、研修日程はP11~12)

2011 年度第 19 回総会ひらく・・・招聘研修など見直し取り組む



大阪マイペンライは6月2日、PLP会館で第19回総会を開催。総会には会員、団体会員組織からの参加者など約90名の参加をいただきました。

冒頭、森代表(写真)が会を代表して「府議会で『維新の会』という地域政党が議員を増やされ、日の丸・君が代条例の議論がされている。『国家』をどう考えるのかということ置いておいたとしても、日の丸君が代の議論をするときの枕詞に、『子どもとしての国際感覚を養う』と言われていることに疑問を感じている。本当の国際感覚とはそれぞれの国の文化の違いなどを実際に知り体験していくことと思うが、国際感覚ということが単

なるスローガンとして使われているように思う。大阪マイペンライは地に足をつけて、小さな活動を積み上げ、顔と顔の見える活動を続けて、アジアの人々とつながっていききたい。サワディ基金、相互交流・スタディツアー、絵本活動など皆さんに支えていただいていることに感謝し、さらに今後もアジアの地域の中で着実に歩んでいけますようお願いいたします。」などとあいさつしました。

議事では、結成18年を迎え招聘研修などの主要活動の見直しを提案した第1号議案「活動の経過と方針」を稲葉事務局長より、第2号議案「10年度決算案と11年度予算案」を松尾会計幹事より提案し、田村会計監事から報告された10年度決算監査報告とともに承認されました。方針の中では、4年目の「国際ボランティア貯金」寄付金の配分によるタイ・バンコクでの公開保育研修事業の実施についても確認されました。また、高橋副代表から森代表をはじめとした「2011年度役員体制案について」が提案され、全体の拍手で承認されました。

総会の2部では、シャンティ国際ボランティア会の国際事業課長の中原亜紀さんにお越しいたいただき、「共に学び、共に生きる」と題する記念講演をいただきました。(2頁以降)

2011 年度国際ボランティア貯金寄附金事業

第1回バンコク公開保育研修事業報告(P5~P11)

目次 ■ 2011年度招聘研修はじまる(P1) ■ 第19回総会開く(P1) ■ 中原亜紀さんの記念講演(P2~5) ■ バンコク公開保育研修事業報告(P5~11) ■ 招聘研修スタッフのプロフィールと研修日程(P11~12) ■ 会員となって交流の輪に! ・ ・ ・ 寄附金・会費のお願い(P12) ※写真は瀬戸正夫さん他から提供いただきました。

「共に学び、共に生きる・・・タイでの15年を振り返って」

シャンティ国際ボランティア会海外事業課長 中原亜紀さん講演（要約）

大阪マイペンライの皆様によるタイ、カンボジア、ラオスへの支援に感謝したい。「共に学び、共に生きる」と題して、海外での活動を通じて考えたことをお話したい。

私は1998年にSVAに入り、タイのスラムの開発事業に携わり、2001年からはタイとミャンマーの国境の難民支援事業に約6年間かかり、2009年に帰国し、現在の任務についている。（SVAの海外での活動報告のお話をいただきましたが、紙面都合で割愛させていただきます。）

私が海外で活動を始めて15年になるが、振り返ってお話したい。学生ときはNGOの活動には無関心で、将来はデザイナーになりたいとの夢を持っていた。大学3年の時、アメリカに語学留学



し、ホームステイ先から黒人コミュニティを通して学校に通っていたが、その途中で子どもから「黄色人種」と言って石を投げられた体験をした。これを機会に差別の問題に関心を持ち、帰国後、差別問題や人権運動などに興味を持つようになった。そして、ボランティア活動に携わり、現地の人と向き合った活動をしたと、たまたま東南アジアのタイに行き、そこで様々な出会いをして15年になった。

タイ・バンコクのクロントイでJVC（日本ボランティアセンター）の女性と知り合い、スラムを訪れた。初めは緊張したが、スラムで活動していたクロントイのドゥアン・プラティープ財団（以下DPF）の話聞いて、関心を持ちスラムに関

する本を読み漁った。

DPFでボランティアをすることとなり、スラムに住んで生活を始めた。最初は怖いこともあったが、生活が落ち着く中でスラムの人々の親切さを感じ、家族のように接してくれる中で、コミュニティとしての家族同士、地域同士の支えあいを感じることができた。スラムのコミュニティには安心感があり、4年間の生活の中で、地域の人々の顔も覚えることができた。

スラムで生活し、教育の力を実感

DPFでは創設者であるプラティープ・ウンソンタム・秦氏（以下、プラティープさん）との出会いがボランティア活動に入る大きなきっかけとなった。プラティープさんを通じ、教育の持つ力、重要性を、頭ではわかっていたが、実際にスラムで生活して実感することができた。

プラティープさんは貧困の連鎖ということを言われる。教育を受けられないと読み書きができない。読み書きができないと安定した職業に就けない。安定した職業に就けないと収入が少ない。この結果、教育を受けられないという連鎖だ。プラティープさんは「人間は生まれる場所を選べない」ということを言われる。「スラムにたまたま生まれたことで、教育を受けられないのはおかしい。一緒にできることがあり、手を貸してほしい」といわれた。また、住民に対しても子どもの教育をどうしていくのか迫っていた。

「人間は生まれるところを選べない」という言葉にショックを受けた。この言葉は、その後取り組んだミャンマー難民キャンプ事業においても言われたことで、私に重くのしかかった言葉だ。

DPFで3年間働いたが、あくまでボランティアの域を出られないことを感じ、日本の子どもの問題を考えることも含め、日本と海外の仲介的役割を担いたいとシャンティ国際ボランティア会（SVA）で働くこととなった。

NGOは触媒、主体は住民

SVAではその創設者の一人である有馬実成さんとお亡くなりになる2年前にお話しする機会を得た。有馬さんは「NGOは触媒であるべきだ。黒子で、あくまで主体ではない。」と言われた。SVAはカンボジア難民キャンプの活動を契機に創設されたが、そこにおいても「カンボジア人自身が解決する能力を持っている」と強調されていた。

「触媒」と言う言葉だが、プラティープさん自身も「スラムの人間自身が自分たちの問題を解決すべきで、その主体は自分たちだ」ということを言われていた。有馬さんとプラティープさんの言葉が自分の中で重なった。NGOがどういう立場で活動にかかわるべきかを考えさせられたきっかけで、私自身のNGOにかかわる姿勢を学ぶ契機となった。

有馬さんはカンボジア難民の立場に立ち、民族のアイデンティティーの危機を訴え、SVAとしてそれを守るために、図書館活動やクメール語の教育、伝統舞踊の継承などに取り組んだ。スラムにおいてもプラティープさんは人間としての尊厳や誇りを子どもたちにももってほしいと、教育支援に取り組んだ。これを契機に民族のアイデンティティーということがどうあるべきなのかを考えるようになった。日本人であってもタイ人であってもカンボジア難民であってもそれぞれアイデンティティーの違いはあったとしても、人間の尊厳は守られるべきであるということを考えるようになった。

アジア子ども文化祭

アジア子ども文化祭は1996年から10年間開催されたが、そのうち3年間タイで携わった。スラムや貧しい農村の子どもたちがそれぞれの文化を披露する活動だ。民族の文化、多様性を認め合うことを子どものころから学んでほしいとの思いで、未来への希望を託すことを含めて取り組んだ。99年の第4回文化祭には、大阪の和太鼓「無限」が出演した。初めて日本の子どもたちを迎えて開催されたものだ。日本は近いようで遠い国だ。日本の文化を知る機会となった。部落問題を抱えつつ、太鼓という文化をしっかりと作り上げている姿勢が感じられた。同時に日本人としてのアイデンティティーということを考えさせられた。自分の文化に誇りを持って生きていくことが大切だと感じた。

子ども文化祭にはその前段でキャンプ活動があるが、バンコク近くの海岸で子どもたちが遊んでいる写真に写っているコアさん（当時15歳）は両親がベトナム戦争の中で枯葉剤（ダイオキシン）を浴びて、その後遺症で（子どもの）コアさんに先天性色素異常による斑点の障害がでたのだ。コアさんは「自分ような障害を持つ子どもをこれ以上増やさないで」と、反戦・平和の活動を行っている。この写真の3人は身振り手振りで仲良くコミュニケーションをとっているが、この写真から反戦・平和のメッセージの発信を感じることができて大切にしているものだ。

「人間は生まれるところを選べない」・・・ミャンマー難民キャンプで活動して

国境ということを考える。2001年からミャンマー難民キャンプ事業に従事した。サルウィン川はタイとミャンマーの国境となっている。国境という概念はこの国では当たり前のことだが、日本人にとってはイメージしづらいこと。キャンプ内の生活は厳しいが、人々は「国境があったから生きていくことができた。」という。ミャンマーの軍事政権の抑圧の中で、国境（逃げて行ける場所）がなければ少数民族の人々は生きていけなかったかもしれないのだ。

タイ政府は、10数万人の難民を人道支援として受け入れ、それらの人々が生活できているのだから、これはすごいことだ。東南アジアの人々は国境があり、隣国と付き合う姿勢を持っている。難民受け入れについては日本も行っているが、その姿勢は厳しいものだ。

キャンプで難民の人たちと出会ったが、国境にたどり着けたから今生きていると言う。今のキャンプにおいてはそこで生まれた子どもたちが自分の国を知らずに、キャンプという社会しか知らずに育っている。子どもらの笑顔の中に限られた環境の中でしか生きていくことができない現実がある。難民問題にかかわった6年間で、ようやく難民の人々が思っていること、考えていることを垣間見ることができた。キャンプでの活動を通じて民族のアイデンティティーのことを考えるきっかけとなった。少数民族の方々のアイデンティティーを大切にしなければならないと考えさせられた。

キャンプの中には多くの少数民族の方がおられたが、中心的な少数民族にカレン族がある。彼らは50年以上ミャンマーの軍事政権と戦っている。彼らには4つの信念がある。「1 我々は決して降伏しない 2 我々は武器を保有し続ける 3 カレン族に国家としてのすべての権利を与えるべきである 4 我々は自らの手で国家の運命を決める」の4つだ。

今なおカレン族の中に受け継がれているが、アイデンティティーを守るということは大切だが、かなりリスクなもので、怖いとも思った。これを子どもたちも学んでおり、子どもらがこれを復唱し



ている姿に怖さを感じた。民族のアイデンティティーの継承ということは国によって異なるが、NGOの活動はこれをきっちり守っていけるよう考えていかねばならない。

ビルマ側の難民キャンプの若者たちに話を聞いたが、彼らも子どものころから民族の信念を教えられていて、戦争があれば戦争に行くと言っている。ここでも子どもたちには間違ったアイデンティティーとして、戦争を続けていくことが受け継がれており、驚きとともにショックを受けた。

キャンプでの活動の中では生と死ということを考えさせられる。ここでもプラティープさんの言われる「人間は生まれるところを選べない。」という言葉が重くのしかかる。子どもの誕生の瞬間は感動的だが、子どもたちが育っていく環境、キャンプの中でしか生活していくことができないことを考えた場合、その子どもの未来に対して悲しみがこみ上げた。

ある図書館活動の協力者が58歳で亡くなられた。キャンプの外に出て早く治療すれば助かった命かもしれないが、キャン内的生活であるがゆえにという思いがあった。キャンプ内での生と死に立ち会って、NGOとして何もできないという限界性を感じた。これがキャンプの現実だ。こういったキャンプの中での生と死がある中で、NGOの活動を続けていくことに意義があるのだと理解した6年間だった。

子どもたちの笑顔が大人を元気づける

東日本大震災の救援活動で宮城県の気仙沼に入った。映像以上の被害で、言葉を失う状況であった。

復興に向けて人々は奮闘しているが、地域の皆さんはバラバラになっており、高齢者は疲れ切っている。そのような中でも、子どもたちは元気だという。子どもたちが元気であれば周りの大人も元気になる。このような中でイベントを開催したが、みんなが集まれば力がよみがえり、地域として団結していこうということになるので、これからも活動を続けていきたい。難民キャンプでも地域の団結や、子どもの元気は周りの大人たちを元気づけるということが言われていた。

日本での現地での活動は初めてであり、ドキドキすることがあったが、海外の活動と日本での活動は何か共通するものがあると思った。人と人がしっかりと向き合っ取り組むことの大切さを感じた。

カンボジア難民キャンプの活動を始めてから、SVAは30年を迎える。日本のボランティア団体が海外で活動を始めるきっかけがこのカンボジア難民キャンプではなかったかと思う。この30年は、日本のボランティア活動に対する関心が高まり、大きな変化があった30年だと思う。

東日本大震災に対して多くの国から支援をいただいている。今まで、日本が援助する立場から援助される立場になった。カンボジアのコミュニティやタイのスラムでは厳しい生活の中で大震災への募金活動が取り組まれた。カンボジアの村では子供たちが集まって僧侶とともに祈りをしてくれた。子どもたちが村で募金活動を取り組み、中にはぼろぼろの紙幣を含まれていたそうで、集まったお金は日本円で6000円だが、村の生活では1か月の生活費に当たるような額だ。彼らの思いが伝わってくる。

「支援する、される」の関係を超えて・・・国際交流をあらためて考える

日本では外務省の会議の中でODA予算を2割カットする議論がなされており、要望して1割カットにとどまったが、このような削減の下では海外支援は大変な状況となる。しかし、「今の時期、海外支援を言っている場合か」という非難の電話が殺到したとのこと。

これまでの日本のODAによる支援活動によって海外とつながってきた結果が、今回の海外からの支援につながっている。震災の被災地の支援を行っていくことはもちろん大切で、復興を進めていく中で、国際協力のことについても考えていく必要があるのではないかと思う

避難所でのインタビューで、女性が「これまでスマトラ沖地震やニュージーランド地震などについて、大変だが、他人事のように思っていた。自分が避難する立場になって、海外からの支援を受けて、今まで海外支援について関心がなかったことが恥ずかしい。自分も今後は関心を持っていきたい。」との話をしておられた。震災を通して日本の海外国際協力の在り方に大きな変化をもたらすのではないかと思う。



ここに難民キャンプの子どもたちの絵があるが、自分の両親が軍事政権に殺されている様子など生々しい絵だ。図書館活動を通じて子どもたちが絵本に接することで、政治的自由が得られることができると考えてきた6年間であった。そういう意味で図書館を開くことができたことを喜んでいる。難民キャンプやタイのスラム、ベトナムなど子どもたちのアイデンティティを大事にして、自分の文化を守り、認め合う平和な社会をめざす人材に育ててほしい。

15年間は長いようで短い15年だった。現地で学んだことは、ボランティアとはどういうことをすることか。当たり前だが人は一人では生きていけない。支えられて生きており、これはキャンプ内でも、スラムでも同じことだ。大震災の被災地でも同じといえる。援助するや援助されるという一方的な言い方をする必要はなく、援助しに来ているが逆に援助されているという関係があると思う。SVAのビジョンとして「共に生きる」ということを言ったが、今後日本の中でどう伝えていけるか、東京の活動の中でどう表現していけるか、活動につなげていけるか自分の中ではわからないところもあるが、これまでの財産を生かして国際協力にかかわっていきたいと思う。

(中原さんの講演を事務局の責任で要約したものです。)

2011年バンコク公開保育研修事業報告

どの公開保育研修でも活発な意見が出て、大成功！ 今回は18か所の保育・教育施設から100名申込

講師の感想・・・・・・・・

110人を対象の活動大変だった。今後、同様の施設からの要望には、グループ別に、あるいは2部制・3部制など対応する方が子どもはもっと楽しめる。今後はシーカーがメインリーダーに、サブリーダーとしての手助けは惜しみません。・・・橋本さん

ギップさんの「大きなかぶ」がとても素敵、子どもへの誘いかけ・子どもの気持ちに寄り添っていた。・・・森中さん

3年前は保育者を対象として研修した。今回は子どもといっぱいであうことができ、とてもうれしかった。シーカーのスタッフと一緒に活動に感激。・・・徳永さん

公開保育事業報告《概要と意見交流研修会で出された意見》

プラサートシン保育園 (6月23日午前中) 担当講師 橋本暢子さん

公開保育参加者 (子ども4~5歳 60人、保育者6人)

意見交流研修会参加者 (外部見学者14人、当該保育園 2人 園長1人)

活動内容：《・頭・肩・膝・ボン ・アヒルのダンス (CD) ・新聞紙で遊ぶ ・ボウリング
・パーボールンであそぶ ・ジェンカ》

意見交流研修会 進行：ギップさん

・電車労組：小さい子どもの保育園。2010年9月に公開保育、1歳過ぎから4歳くらいまでが一緒に遊ぶことを楽しんだ。今日は新聞紙の遊びを見学し、今後保育園で活かしたい。

・スワンオイ地区の保育園：2歳半から5歳までの保育園。今日の活動いずれも子どもたちは楽しむであろうと見せていただいた。

今度の日曜日、当保育園で公開保育を行うが、他の公開保育日には9人の保育士が分担で見学に来ている。それほど意義がある活動だと思っている。

・マヒドン大学附属幼稚園：それぞれ少人数のクラス、他のクラスの子もたちと遊べない、一緒にいると緊張する。参考になる活動を学びに来た。

・当該保育園：遊びに協力的に楽しんでいる。日々子どもに教えているときには見られない顔を見せて遊んでいる。ありのままの子どもが見られた。

シーカーの研修に参加して子どもたちにとって良い活動だと思った。しかし、直接実践いただくことでより理解することができた。

・次の機会にはぜひわが園で実践してほしい。



- ・見学させていただきよかった。いろいろな活動みな実践できる
- ・からだを使った活動、音楽を活用した活動、それぞれが活用できる。

講師・橋本さん：・子どもが楽しむことを一番の目的だと思っている。楽しむことで子どもは様々なことを身につける。

紙を折る、2人で一つのものを作る。助け合う姿が見られた。パーポルーン(パラポルーンのこと)、中に入ることを楽しんでいる。待っている子どもたちも次に自分たちが遊ぶということを理解して待っていた。

・**マヒドン大学附属幼稚園**：今日の活動のコンセプトを確認したい。一つ目・子どもが楽しいと感じるよう努力をする。二つ目・子ども自身が自分で考える機会を大事にする。三つ目・音楽をうまく活用して子育てを支援する。

マイペンライ・松尾：楽しいと感じることとても重要。楽しかった次もしたいという意欲、意欲を持って取り組み楽しかった、それが自信につながる。

マイペンライとしてシーカーアジア財団とともに研修活動の経過を説明、シーカーアジアのスタッフとともにの活動であり、今日も昨日1日かけてシュミレーションを行い、スタッフの力でうまく活動できた。

ブック(シーカ事務局次長)：公開保育の効果はとて高い。実際に子どもの反応を、保育者のかかわりをじかに見る研修の意義は高いと実感した。

これからは大阪マイペンライの力を借りることなく、シーカーのスタッフで活動できるよう努力していきたい。

クロムガン幼稚園(6月23日(木)午後)担当講師 橋本暢子さん

公開保育参加者(5歳児 172人、保育者 12人)

意見交流研修会参加者(外部見学者：13人、当該幼稚園：6人)

活動内容<<・頭・肩・膝・ポン ・アヒルのダンス ・新聞紙で遊ぶ ・パーポルーン>>

意見交流研修会 進行：ムアイさん

・**ラームインター保育園**：昨年2月公開保育の場所となった。1歳ごろから5歳までの子どもの活動だった。今日は5歳児の活動で大人数ではあるが、活動的で楽しい内容であったように思う。破る音、ほおり投げるなど楽しんで活動していた。

・**スワンオイ地区保育園**：2月に見学した保育園より大人数でとても活動的。親子活動を見学した。同年齢でしかも5歳児という年齢である中とても面白かった。活動的だし子どもが楽しんでいた。

・**マヒドン大学附属幼稚園**：それぞれの活動で子どもの発達どの部分を伸ばしているのか。新聞のボールを袋に入れる際、ボールに色がついていけば間違った袋に入れるとすぐわかる。色がついていない中子どもに指摘ができない。

・**クロムガン幼稚園(当該幼稚園)**：1クラス40人強で4クラス。全員の活動をお願いしたものの楽しめないのではととても心配していた。

新聞紙がゲームにまで発展し、また子供たち自身が待つという行動ができることに驚いた。

ペットボトルを紙のボールで当てるゲームの際、少し混乱した。もっと混乱した場合どう対応すればいいのか



講師・橋本さん：大人数でどう遊んだら子どもは楽しめるのかと悩んできた。子どもたちの遊びに対しての興味の力に助けられ、楽しく活動できたのではと思っている。子どもが楽しむことにこだわりたいと活動し、その事が子供の力に結び付くと考えている。

- ・クロンガム：一人一人が楽しんでいることがよくわかった。育っている力も気が付いた。考える力、待つ力など。
- マイペンライ：松尾：子どもの気持ちと育つ力はとても関係がある。走りなさいと言われ走ると、好きなものをとるために走るとでは同じ走るという活動でも全然異なる。子どもが楽しむことで、次の活動への意欲が育つ、そして活動することで様々な体験を楽しみそれが自信につながる。身の回りのものが子どもにとって大事な教材だと考えている。おうちで読む新聞が、お風呂になって遊べる、ボールになる、ゲームの材料になる。いろいろなものに変化する。身の回りの物をその用途だけでなく、どのように工夫すればおもちゃになるのかという工夫する力、一つの用途にしか考えられないのではなく、様々なものを多様に、多様なものとして認識する土台になる。おもちゃは、高価なおもちゃ屋さんにあるのではなく、身の回りにみんなですぐに工夫することによって埋もれている。

ワットターカム幼稚園 6月24日午前担当講師：橋本暢子さん

公開保育参加者（4歳児 110人、保育者：6人）

意見交流研修会参加者（外部見学者 22人、当該保育所：5人）

活動内容：3クラスの子どもを4色のグループに分ける

- 《・頭・肩・膝・ポン ・アヒルのダンス ・新聞紙で遊ぶ ・紙でっぽうづくり
- ・オセロ ・パーボールン ・お土産に紙風船》

意見交流研修会 進行：プラーさん

- ・スワンオイ地区保育園：初めて見た活動多く、とても参考になった。パーボールンへの子どもの喜び・楽しさの表情が印象的
- ・マーシー財団：大人数で子どもの興味が外れると、スタッフがうまく誘導しているのが印象的
- ・ペン（保育所を運営・以前シーカスタッフで大阪にも招聘研修で来日）4歳児で大人数、知らない人・言葉の語りかけのなか、注意散漫の子どもが多いように思った。
今日の活動を全体見て、子どもが楽しいと感じる活動を行うには先生のエネルギーが多分に必要。先生は疲れる。今日の子どもが楽しんだ活動を取り入れるか否かは、先生しだい。

・マヒドン付属幼稚園：感謝している。以前紙をちぎる活動をしたが、うまくちぎれなかった。準備不足だったようだ。

新聞をちぎるのを見せる。大きい音や小さい音がするのも気づく。ちぎったものでみんなで遊ぶ。そしてボールをつくり、それが次のゲームの材料に。遊びが連続して

る。小さいボールを作って子ども同士が互いに作ったものを見せ合っている姿が素晴らしかった。

- ・ターク県保育士の代表：子どものことがよくわかる活動。子どもにとって関心が高いことをいっぱい行っている。初めは混乱していたが、あとは遊びの楽しさをわかって待てるようになった。好きな活動をする事への信頼感からだろう。
大阪マイペンライとシーカーアジア財団の研修に参加し多くを学習したが、子どもの実践にはつながっていなかった。それが今日の活動を見学することでつながった。
- ・南タイ：子どもの握力が弱いと訴える親に、今日のボールづくりの遊びなどを紹介したい。
- ・マーシー財団：すべて素晴らしい活動。だが、子どもたちがぶつかり合う姿が見られた。安全に配慮する指示が必要。また、ぶつかり合った時など、ごめんなさいと言わせるなどケンカ時の対応が必要。
大人数の子どもで、スタッフが少なすぎるのではないかと。大人数でするには無理がある活動。
- ・スワンオイ地区保育園：危ないとは思わない。安全面を考えすぎると子どもの主体的行動を奪うことにもつながる。
- ・ワットターカム幼稚園(当該幼稚園)：入園して1か月、どうなることやらと心配したが、心配し



ていたよりよく遊んでいた。安全面のご意見は今後に生かしていきたい。公開保育という初めての体験、とても学ばせていただいた。

- ・マヒドン大学教授（衛生学）：遊びの組み立て方がとてもよかった。チームごとに遊んでいたが、もっとチームリーダーの役割を明確にしたほうがよかったのでは。新聞紙、大事なものを遊びに取り入れること、子どもにその押さえが必要。新聞紙のインク有害、後の手洗いが必要。

担当講師：橋本暢子さん：たくさんの人数のしかも4歳児。悩んだが楽しい時間をいっしょに過ごそうと活動を計画した。知らない人・言葉の通じない人の誘導で混乱していたこともあったが、遊びへの関心の高さから、待つ姿、みんなと一緒に活動するができたと思う。

マイペンライ：松尾：袋にボールを片付ける際、確かに子どもが殺到し折り重なるという姿を生じさせた。あれは、もっと袋を出せば解決することで配慮が足らなかったと思う。しかし、折り重なってもだれも泣かなかった。それはどの子どもも遊びたい、活動したいという思いが強かったからで、すごく驚いた。

ケンカの対応重要。しかしいつも状況を聞いて、話し合わせる・謝るといふかかわりが必要とはいえない。遊びの中で起こり、互いがそれを意識することなく遊びへの興味が強い場合は、そのままにしておくことも大事なかかわりだと思います。

大阪から保育者が遊びをリードしているが、シーカーアジア財団のスタッフがいないと活動は進められていない。時間をかけ、内容を詰め、活動のシュミレーションをして今日を迎えている。

セータムクローマニ保育園（6月25日午前）担当講師：徳永和美さん

公開保育参加者（2歳～5歳親子 28組）

意見交流研修会参加者（外部見学者 25人（行政担当者3人含む）、当該保育所：6人）

活動内容《・頭・肩・膝・ポン ・アヒルのダンス（CD） ・バスに乗って（CD）・なべなべそこぬけ ・新聞紙遊び ・ヤクルトでマラカスづくり》



意見交流研修会

・スワンオイ・バンティープ保育園：2月の公開保育研修に参加したが、親子活動は初めて見た。子どもの表情が素敵。保護者の緊張が徐々にほぐれ、最後には本当に楽しんでた。

親子がふれあい遊んでいるのが素晴らしい。

・2月の公開保育実施保育園園長：この保育所の保護者、子どもがとても楽しみ、バスに乗ってはバスから身を乗り出し楽しんでた。このような活動が親子のきずなを深めると実感すべての活動に感銘を受けた。新聞紙から次々連続性の遊び

が素晴らしい。

・マヒドン附属幼稚園：職員28人が順番に参加している。感動した。親と子どもの表情が徐々に変わっていくことがよくわかった。はじめぎこちなかった親との子の触れ合いが徐々にうれしさに代わる。だれでも遊べるもの、ヤクルトなど日常使っているものがおもちゃになるのがいい。新聞紙有害ではないのか。

・子ども財団ボランティアスタッフ：連続性の遊び素晴らしい。すべてが簡単にできるもの、これをどう応用するのか。講師の方に一つ一つに狙いを教えてほしい。

・障害児のための財団ボランティア：障害のあるわが子も活動に参加。身体的な活動は参加できないこともあったが、他は喜んで参加していた。片づけも遊びの中で行っていること印



象深い。

・ウーパー郡：親子の活動素晴らしい。保育園に求められている内容。母の日・父の日などイベントに活用したい。

担当講師・徳永和美さん：親と子が触れ合うこと少ないなか、何かを作る・からだを触れ合う活動を行う中で親子が密着する快さを感じてほしい。親と子が緊張している姿から、徐々にほぐれ、笑顔・笑い声に。

新聞：活動に連続性がある。日本の新聞は有害とは思えない。ヤクルトなど日常使うもの、家と保育所をつなぐ。

マイペンライ・森中さん：小さい時から親子の信頼関係を結ぶこととても重要。友達・遊びにも影響・保育者の積極性とても重要。

マイペンライ・松尾：日本ではなぜ親子活動を大切に取り組んでいるのか。子育て・子育て環境の変化、子育ての伝承がされにくく・子育て不安や負担感が高い。

タイでも忙しさのなか、触れ合うこと少ないと聞き日本の活動がニーズに合うと紹介している。廃材を活用した手作りおもちゃの重要性。お家で呼んでいる新聞がおもちゃに代わる、ゲームができる。そのものの活用方法が多様になり変わる。工夫する力を養う。



ラートパタナー保育園 (6月25日午後) 担当講師：森中智也さん

公開保育参加者 (2歳～小学生親子 25組)

意見交流研修会参加者 (外部見学者 28人、当該保育所 4人)

活動内容<<・手品 ・しあわせなら手をたたこう ・手作り蒔絵「おおきなかぶ」 ・日本橋こちょこちょ ・なべなべそこぬけ ・「よろしくね」(CD) ・布で遊ぼう 2つにわかれて、シーツ遊び ・紙トンボ作り>>

意見交流研修会

・当該保育所：とても楽しかった。いろいろな年齢が楽しめる活動だった。子どもがほっこり心温かくなる時間が持てた。

・マヒドン付属幼稚園：感動的だった。保護者の子どもへのかかわりが素晴らしい。はじめ緊張していた保護者が徐々にほぐれ、楽しんでいる様子がよく見てとれた。

一緒に活動したかった。次回活動に入らせてほしい。

年齢別の活動をしてもらおうとありがたい。子どもの年齢と活動・ねらいが明確になるので。

父親と子どもだけの活動もあってほしい。

・保育園：参加者への講師の心配りがよくわかった。素晴らしい。参加したい。

・南タイ：保護者にとって、とても素晴らしいひと時だった。

・参加保育者：保育者だけの研修会を開催してほしい。



担当講師・森中さん：親子より楽しそうな姿を出すことで子どもの気持ちを引っ張っていきたい。保育者は子どもに負けない元気と笑顔が必要。先生と遊ぶと楽しいというイメージを持ってもらうこと大切。年齢に合った遊びというより、子どもの興味に沿った遊びと捉えている

マイペンライ・徳永さん：親子の楽しむ姿が印象的。父親の参加も多く、子どもの笑顔が素晴らしかった。

マイペンライ・橋本さん：参加したいと思うほど楽しかった。

マイペンライ・松尾：活動に見学者が入りたいという意見があった。親子活動にみなさんのような保育者が入ると親は活動しなくなる。子ども集団の場にも、知らない人がそれでいてもたくさんいるのにあと 20 人以上も増えると子どもはより緊張する。

2008 年 2009 年は保育者対象の研修会、2010 年から公開保育研修会。今後はシーカーアジア財団のスタッフが公開保育研修・保育者対象研修を実施する。シーカーに依頼してほしい。

年齢別の活動・ねらいが先にあるのではなく、子どもが興味を持っている活動にこどもの育ちに合わせた次のねらいを持つことが重要。同年齢の活動で行ってほしいと意見がありましたが、同年齢でも一人ひとりの姿は少しずつ違うので個別のねらいがあります。異年齢の活動は、年齢の発達に大きな幅があるので、その育ちに沿ったねらいをもつことが必要だし、幅がある分難しい。

再現活動の「よろしくね」、例えばこの活動、1 歳前後の子どもでもリズムにからだを乗せて楽しむとねらいを定めることができるし、4 歳・5 歳でもリズムとことばに合わせてからだを動かす、友達とからだの動きを合わせるというねらいを持つことができます。年齢による活動があるのでなく、同じ活動でもさまざまな年齢のねらいを定めて活動できるのです。



バーンテープ保育園 (6 月 26 日 (日) 午前)

A 担当講師：森中智也さん

B 担当講師：徳永和美さん

A が保育園の親子、B は就学児の親子と設定し、人数も部屋の広さから 15 組と 10 組としていたが、そのように分けること困難で、親子の集まり状況を見ながら入室を誘導し、結果 15 組と 14 組となった。

A 活動

公開保育参加者 (2 歳～小学生親子 15 組)

活動内容 << 「しあわせなら手をたたこう」 ・手作り蒔絵「大きなかぶ」 ・「よろしくね」 C D ・布遊び ・紙トンボ作り >>

B 活動

公開保育参加者 (2 歳～小学生親子 14 組)

活動内容 << 「アヒルのダンス」 C D ・「バスに乗って」 C D ・「な・な・なむでん」
・新聞紙遊び 走り玉入れ ・牛乳パックモクモク人形づくり >>



意見交流研修会

・南タイ：昨日とよく似た内容であったが、会場の狭さから 2 か所に分かれての実施がよかったと思う

・サハータイ財団：年齢別に分かれた活動をするのかと思ったが、会場の関係から二つに分かれての活動だった。「あたま・かた・ひざ・ポン」リズムに乗って遊ぶ活動とてもよかった。紙トンボ、子どもの分を親がしてしまっていた。そんな時の助言は。

新聞紙でボールを作り、走り玉入れの際、そこに入れ

たくない、持っておきたい子どもがいた。どう対応すればよいのか

・プラティープ財団幼稚園：全部楽しかった。異年齢の活動だったのでざわつきがあったように思った。

・当該保育所園長：この日を迎えることができていることに感謝している。

忙しい親の生活、子どもと親の触れ合いをどうしたらいいかと悩んできた。今日の親子のうれしそうな顔を見て、この時間がどれほど親子にとって幸せなひとときであったかが感じられた。

狭い施設に見学に来ていただき、感謝している。

- ・当該保育所保育者：昨日見学させていただいたが、手作りおもちゃが違う。どこの家にもあるものを活用しての教材づくり、とても素晴らしい
8人の職員が、すべての公開保育研修に参加。学んだことを8人でシェアし合うことでたくさん活動を互いに学ぶことができた。
ワットターカム保育園とクローングム保育園は大人数での活動だったが、当保育園でも応用できるものばかり。

担当講師・徳永さん：子どもだけの参加もあり、子ども同士で友達を膝に乗せたり、なべなべそこめけととても楽しんで活動していた。

お家でも楽しめる活動であったと思う。廃材などを活用することで家と保育所の活動がつながる。

担当講師・森中さん：先生が布に乗ってみんなでゆらした時、親子がとてもいい顔していた。

園長先生のまなざし、自然を取り入れている保育環境（ペットボトルで植物を栽培し、保育園の壁などさまざまなところにつるしている）がすばらしい。

当該保育園園長：立地条件に自然がないので少しでもと環境に工夫している。

マイペンライ・橋本さん：親が楽しいと思うと子どもはとてもうれしい。今日は親子ともが楽しかったと思う。

親子での共同作業の時、親がしてしまうのはよくあること。少し助言してあげることも必要。



マイペンライ・松尾：年齢だからざわついているのではないと思う。今日の子どもたち、保護者と一緒でうれしい。興味いっぱい楽しい活動で喜びがいっぱいの姿とらえている。

教材って、高いもの・棚に飾っておくものではなく。うちで必要なくなったものを活用するとおもちゃになるという教材もある。工夫する力、多様性を学ぶ機会であるとともに、お家と保育所を繋ぐものでもある。

忙しさで、子どもの保育所での活動に興味を持てなかった親が、捨てようとしたペットボトルを子どもに言われ、洗って保育所に。ある日迎えに行くとそれがおもちゃになっていた。それから、家の廃材を保育所に持っていく親になったという話は、よく大阪の保育所から聞きます。お家と親と保育所・子どもをつなぐ活動でもある

2011 年度招聘研修スタッフのプロフィールと日程

招聘スタッフのプロフィール

タイ（ドゥアン・プラティーブ財団（DPF））

- ・氏名：Mrs. タッサニー・ヘンブラセット さん 女性 ニックネーム：メツ（写真左）
担当：高齢者プロジェクト 担当 勤務年数：14年
研修目的：日本の高齢者の方々の暮らしぶりを視察したい。
高齢者に対する政府側の対応について知りたい。
- ・氏名：miss. ノンラック・パーンデット さん 女性
ニックネーム：ラック（写真右）
担当：幼稚園職員 勤務年数：8年
研修目的：日本の幼稚園を視察し、その教授法について学ぶこと。
幼稚園教師の福利厚生面について知りたい。
老人ホームの視察を通して、彼らの一日の生活について知りたい。
- ・通訳 中川紀子 さん(ドゥアン・プラティーブ財団スタッフ)



2011年度招聘研修日程

月日	曜日	午前	午後	夜	宿泊
9月10日	土	来日			ホームステイ
9月11日	日		オリエンテーション		ホームステイ
9月12日	月	受け入れ交流(大阪教組・豊中市教職員組合)			受け入れ先
9月13日	火	受け入れ交流(大阪教組・豊中市教職員組合)			受け入れ先
9月14日	水	受け入れ交流(大阪教組・豊中市教職員組合)	受け入れ交流(部落解放同盟大阪府連北芝支部)		受け入れ先
9月15日	木	受け入れ交流(部落解放同盟大阪府連北芝支部)			受け入れ先
9月16日	金	受け入れ交流(部落解放同盟大阪府連北芝支部)			ホームステイ
9月17日	土		絵本ワークショップ(講師:加藤啓子さん)		ホームステイ
9月18日	日	観光(予定)			ホームステイ
9月19日	月・祝	交流(マイペンライ茨木)	セミナー準備(予定)		受け入れ先
9月20日	火	受け入れ交流(自治労茨木ユニオン)			受け入れ先
9月21日	水	受け入れ交流(自治労大阪市職民生支部)			受け入れ先
9月22日	木	受け入れ交流(自治労大阪市職民生支部)	セミナー準備	セミナー・お別れ会	ホームステイ
9月23日	金・祝	観光			ホームステイ
9月24日	土	帰国			

会員となって交流の輪に入りませんか！！

新規会員を募集中です。会員になっていただける方は郵便振込用紙でお申し込みください。引き続き、国際ボランティア貯金事業への寄付もお願いしています。ご協力よろしくお願ひいたします。

会員(団体・個人)の皆さんへ 会費納入のお願い

当会の活動は皆さんの会費で支えられています。2010年度・2011年度の会費の納入をお願いします。(複数年の未納がある場合は分割可)

宛名シールの名前の横の数字がすでに納入いただいている年度です。郵便振替や銀行振込でお振込みください。個人の方は年間3000円、団体は年間10000円の納入をお願いします。

郵便振替 **口座番号 00910-4-18125 加入者名 アジアの保育教育交流推進実行委員会**

銀行口座 **りそな銀行 桜川支店 普通預金 口座番号 2100152**

口座名義 アジア保育教育交流推進委員会